

ピックル用キュウリの暖地適応性品種について

川西良雄・穴吹吉夫・笠井宣弘

ピックル用キュウリの暖地適応性品種を選抜するため、1963 年から 1966 年の 4 ケ年にわたって内外各地から導入した 32 品種の生態、収量、品質などについて栽培ならびに加工両面から追究して下記の結果を得た。

1. 子づるの発生伸長量は、品種によってかなりの差異が認められる。すなわち、アメリカ群は親づるの 10 数節位までに発生した子づるはよく伸長するが、それ以上の節位から発生した子づるは 2~3 節で芯止り状態となる。またロシア群は第 5~10 節位を中心に旺盛な子づるが数本発生伸長する。

2. 雌花の着花習性は、ロシア群は親づるの子づるともに節成性を現わすが、アメリカ群の親づるは飛節性で、子づるは節成性を現わす。またロシア群は単花性であるが、アメリカ群は房成性であった。

3. 導入した各品種は生態ならびに果実の特性などから、アメリカ群の長楕円形、長円錐形、細筒形の 3 群 4 果形に分類した。

4. 雌花着生数ならびに収穫果数は、アメリカ群が多く、ロシア群およびこれに近い F₁ 群は少なかった。しかしアメリカ群はロシア群にくらべて開花結実期におけるボトリチスなどの障害が多かったので結果率は低かった。

5. 収量はアメリカ群、F₁ 群、ロシア群の順位であり、ことに Wisconsin SMR18, Ohio MR17, RX・SMR58 は株当たり 900 g 以上で良好であった。

6. 暖地適性品種を栽培ならびに加工両面から検討した結果、RX・SMR58 が最もよく、適応性品種として選定する。しかし本種に限らずピックル用キュウリは各品種ともに耐病性が低いなどの欠点が多いので今後、品種の改良育成が必要である。